

学部・研究科等の研究に関する現況分析結果

学部・研究科等の研究に関する現況分析結果（概要）	研究 0-1
1. 国立歴史民俗博物館	研究 1-1
2. 国文学研究資料館	研究 2-1
3. 国立国語研究所	研究 3-1
4. 国際日本文化研究センター	研究 4-1
5. 総合地球環境学研究所	研究 5-1
6. 国立民族学博物館	研究 6-1

学部・研究科等の研究に関する現況分析結果（概要）

学部・研究科等	研究活動の状況	研究成果の状況	質の向上度
国立歴史民俗博物館	期待される水準を上回る	期待される水準を上回る	高い質を維持している
国文学研究資料館	期待される水準を上回る	期待される水準を上回る	高い質を維持している
国立国語研究所	期待される水準を上回る	期待される水準にある	改善、向上している
国際日本文化研究センター	期待される水準を上回る	期待される水準を上回る	高い質を維持している
総合地球環境学研究所	期待される水準を上回る	期待される水準を上回る	質を維持している
国立民族学博物館	期待される水準を上回る	期待される水準を上回る	高い質を維持している

注目すべき質の向上

国立歴史民俗博物館

- 国外の研究ネットワークの強化を図っており、韓国国立中央博物館と協定を締結し、共同研究や学術交流の蓄積を踏まえ、第2期中期目標期間に同博物館開催の企画展示への全面的な協力をを行い、国際企画展示を韓国国立3研究機関と共同で開催するなど、恒常的な関係を築いている。
- 卓越した研究業績として、「シーボルト父子関係資料をはじめとする前近代（19世紀）に日本で収集された資料についての基本的調査研究」があり、文理の枠を超えた学際的研究に取り組み、国際ネットワークを築いている。

国文学研究資料館

- 組織を単一の研究部に統合し、多数の共同研究を有機的に組織する体制への転換を図っている。
- 平成26年度からの日本語の歴史的典籍に関する国際共同研究ネットワーク構築計画において、国際共同研究ネットワーク委員会の設置、国際共同研究の企画立案、国際シンポジウムや共同研究等を実施し、海外の研究者・研究機関とのネットワーク形成を促進するなど、国際共同研究のネットワークを整備している。
- 特定研究「在米絵入り本の総合研究」及び「近世的表現様式と知の越境—文学・芸能・絵画による総合的研究—」は、学術的に高い評価を受けるとともに、マスメディアにも取り上げられている。

人間文化研究機構

国際日本文化研究センター

- 外国人研究者の招へい人数や招へい回数の制限を撤廃した結果、海外の研究者との連携を促進する体制を整備している。
- 「日記の総合的研究」をはじめ、社会・文化面でも卓越した研究成果をあげている。

国立民族学博物館

- 研究領域「包摂と自律の人間学」及び「マテリアリティの人間学」に包括される9国際研究プロジェクトでは、海外の研究者を迎えて研究の重点化・国際化を図っている。また、国際共同研究の成果を第2期中期目標期間には11冊を出版しており、英語のほかロシア語等でも出版し、国際発信力を高めている。
- 文化人類学・民族学の「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」では、アンデス文明史上最古の金属製品を伴う墓の発掘で、文明形成を解明したことにより、研究代表者がペルー国文化功労賞を受賞している。

国立歴史民俗博物館

I	研究の水準	研究 1-2
II	質の向上度	研究 1-5

I 研究の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

分析項目 I 研究活動の状況

〔判定〕 期待される水準を上回る

〔判断理由〕

観点1-1「研究活動の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 第2期中期目標期間（平成22年度から平成27年度）の研究状況は、共同研究52件、資料調査研究プロジェクト10件、展示プロジェクト47件のほか、機構関連共同研究9件、連携展示2件を実施している。
- 基幹研究として平成24年度に「震災と博物館活動・歴史叙述に関する総合的研究」を実施しているほか、第2期中期目標期間において毎年度10件以上の基盤研究、公募型の基盤研究、開発型共同研究、日本関連在外資料調査研究及び連携研究等を実施している。
- 総合展示新構築や重要資料の散逸防止等を目的として、正倉院流出文書等1,654件6,697点を購入し、複製資料や研究映像等337件618点を製作するとともに、資料4,430件13,495点の寄贈を受けている。資料調査研究プロジェクトの成果として資料目録・図録計6冊を公開しているほか、収集した資料は展示・研究等に活用している。

観点1-2「共同利用・共同研究の実施状況」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 諸プロジェクトに462研究機関、612名が参画し、学際的な研究を行っているほか、新たに3件の学術交流協定を締結し、共同研究等を実施している。また、東日本大震災の際に、文化財レスキュー事業に参加するとともに、平成24年度の全国歴史民俗系博物館協議会の設立・運営において、被災地の研究機関、研究者と連携し、特別集会や特集展示を実施している。
- 「日本関連在外資料調査研究事業」の総括機関として、国内組織のほか、海外24機関の協力を得て、調査研究を実施、国際化、ネットワーク形成に貢献している。
- 第2期中期目標期間に海外3研究機関との共催で国際企画展示を開催しているほか、国際シンポジウムを11回、国際研究集会を5回開催し、国立慶北大学校博物館（韓国）やウェールズ国立博物館（英国）等、国際交流協定を8件締結している。
- 第2期中期目標期間に若手研究者の育成として任期付助教12名、機関研究員・プロジェクト研究員11名等を雇用し、外来研究員延べ31名（うち日本学術

振興会特別研究員6名)を受け入れている。また、大学による博物館活用(展示や資料の授業への利用等)に協力しており、来館数は合計327件となっている。

以上の状況等及び国立歴史民俗博物館の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 期待される水準を上回る

〔判断理由〕

観点2-1「研究成果の状況」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 学術面では、特に日本史の細目において卓越した研究成果がある。博物館型研究統合の理念に基づき、「東アジアを中心とする国際関係を重視した日本の歴史・文化研究」等を重点課題として、日本の歴史と文化に関する研究に取り組んでいる。
- 卓越した研究業績として、日本史の「シーボルト父子関係資料をはじめとする前近代(19世紀)に日本で収集された資料についての基本的調査研究」があり、19世紀収集日本関連在外資料について学際的・大規模調査を実施しているほか、『古文書張交屏風』の精密な修復・調査により、表具過程の復原に関する新事実の発見等多くの成果をあげ、その図録はアメリカ図書館協会貴重書・手稿部会の2016年Leab展示賞第3部門を受賞している。
- 社会、経済、文化面では、特に日本史の細目において卓越した研究成果がある。
- 卓越した研究業績として、日本史の「シーボルト父子関係資料をはじめとする前近代(19世紀)に日本で収集された資料についての基本的調査研究」、「古代における文字文化形成過程の総合的研究」があり、「古代における文字文化形成過程の総合的研究」は、初公開を含む国内外の様々な古代日韓交流関係資料を学界やマスメディア等に紹介している。

以上の状況等及び国立歴史民俗博物館の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

なお、国立歴史民俗博物館の専任教員数は43名、提出された研究業績数は10件となっている。

学術面では、提出された研究業績9件（延べ18件）について判定した結果、「SS」は3割、「S」は7割となっている。

社会、経済、文化面では、提出された研究業績7件（延べ14件）について判定した結果、「SS」は5割、「S」は5割となっている。

（※判定の延べ件数とは、1件の研究業績に対して2名の評価者が判定した結果の件数の総和）

II 質の向上度

1. 質の向上度

〔判定〕 高い質を維持している

〔判断理由〕

分析項目 I 「研究活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 全国の研究機関との研究のネットワーク強化のため、国内交流事業制度を導入している。
- 全国歴史民俗系博物館協議会の設立を主導し、第3期中期目標期間（平成28年度から平成33年度）から始動する総合資料学プロジェクトの基礎を築いている。
- 国外の研究ネットワークの強化を図っており、韓国国立中央博物館と協定を締結し、共同研究や学術交流の蓄積を踏まえ、第2期中期目標期間に同博物館開催の企画展示への全面的な協力を行い、国際企画展示を韓国国立3研究機関と共同で開催するなど、恒常的な関係を築いている。

分析項目 II 「研究成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 卓越した研究業績として、「シーボルト父子関係資料をはじめとする前近代（19世紀）に日本で収集された資料についての基本的調査研究」があり、文理の枠を超えた学際的研究に取り組み、国際ネットワークを築いている。
- 異文化圏における日本の資料の研究により、歴史認識の相互理解や世界史的な視野での日本歴史研究に取り組んでいる。
- 国際企画展示や海外機関への展示協力により、研究成果の公開発信を促進し、博物館型研究統合の国際化を進めている。

これらに加え、第1期中期目標期間の現況分析における研究水準の結果も勘案し、総合的に判定した。

2. 注目すべき質の向上

- 国外の研究ネットワークの強化を図っており、韓国国立中央博物館と協定を締結し、共同研究や学術交流の蓄積を踏まえ、第2期中期目標期間に同博物館開催の企画展示への全面的な協力を行い、国際企画展示を韓国国立3研究機関と共同で開催するなど、恒常的な関係を築いている。
- 卓越した研究業績として、「シーボルト父子関係資料をはじめとする前近代（19世紀）に日本で収集された資料についての基本的調査研究」があり、文理の枠を超えた学際的研究に取り組み、国際ネットワークを築いている。

国文学研究資料館

I	研究の水準	研究 2-2
II	質の向上度	研究 2-4

I 研究の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

分析項目 I 研究活動の状況

〔判定〕 期待される水準を上回る

〔判断理由〕

観点1-1「研究活動の状況」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 国文学、日本史、書誌学、アーカイブズ学における共同研究の「王朝文化の流布と継承」では、2冊の報告書を作成している。また、日本文学、歴史学、アーカイブズ学による共同研究の「近世地域アーカイブズの構造と特質」では、2冊の報告書を作成している。
- 日本文学等の基礎研究と国際研究の新たな研究進展を図るため第2期中期目標期間（平成22年度から平成27年度）に開始した共同研究は、基幹研究は5件、特定研究は17件、国際連携研究は1件となっている。
- 平成26年度から日本語の歴史的典籍に関する国際共同研究ネットワーク構築計画を実施し、古典籍共同研究事業センターを設置するとともに、国際共同研究は2件、総合書物学の構築を目指す共同研究は9件、公募型共同研究は5件、拠点主導共同研究は4件、異分野融合共同研究は2件を実施している。また、古典籍データベースの機能強化のため、大学、研究機関及び民間企業と研究開発系共同研究は8件を実施している。
- 平成25年度から、学術交流協定を締結した国外の大学等研究機関との間で、新たな視点からの研究の創出を目指し、国際連携研究「日本文学のフォーラム」を実施している。

観点1-2「共同利用・共同研究の実施状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 蓄積された研究情報や収集資料の整理・保存を行い、日本古典籍総合目録データベースをはじめとするデータベースで研究資料等を公開し、国内外の大学等研究機関や研究者に提供するなど関連分野の研究を推進している。また、所蔵している古典籍350点の全冊画像データとその書誌データは、国立情報学研究所の情報学研究データリポジトリ（IDR）で一般に公開している。

以上の状況等及び国文学研究資料館の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 期待される水準を上回る

〔判断理由〕

観点2-1「研究成果の状況」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 学術面においては、特に日本文学の細目において卓越した研究成果がある。所蔵資料に基づく基幹研究や、絵入り本や物語絵に関する人文学の諸領域にまたがる学際的な特定研究において成果をあげている。
- 卓越した研究業績として、日本文学の「在米絵入り本の総合研究」があり、ニューヨーク公共図書館等、米国に所蔵される絵巻物や絵入り版本を対象として、国内外の文学・歴史・宗教・美術史等の領域の研究者と連携し、学際的、国際的な研究を行っている。
- 社会、経済、文化面では、特に日本文学の細目において特徴的な研究成果がある。また、王朝文学の後世における展開をめぐる基幹研究の成果が、書誌学や文献資料の処理の面で啓発的役割を果たし、大学の教科書や参考書にも採用されている。
- 特徴的な研究業績として、日本文学の「近世的表現様式と知の越境—文学・芸能・絵画による総合的研究—」がある。展示企画「江戸の表現—浮世絵・文学・芸能」は 2,000 名を超える来館者がありマスメディアで取り上げられている。

以上の状況等及び国文学研究資料館の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

なお、国文学研究資料館の専任教員数は 34 名、提出された研究業績数は 8 件となっている。

学術面では、提出された研究業績 8 件（延べ 16 件）について判定した結果、「SS」は 3 割、「S」は 6 割となっている。

社会、経済、文化面では、提出された研究業績 4 件（延べ 8 件）について判定した結果、「S」は 9 割となっている。

（※判定の延べ件数とは、1 件の研究業績に対して 2 名の評価者が判定した結果の件数の総和）

Ⅱ 質の向上度

1. 質の向上度

〔判定〕 高い質を維持している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「研究活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 4研究系に細分化していた組織を単一の研究部に統合し、目標、規模、様態に応じて基幹、特定、国際連携等の研究カテゴリーに整理、多元化することで、共同研究を有機的に組織する体制への転換を図っている。
- 平成26年度からの日本語の歴史的典籍に関する国際共同研究ネットワーク構築計画では、国際共同研究ネットワーク委員会の設置、国際共同研究の企画立案、国際シンポジウムや共同研究等を実施し、海外の研究者・研究機関とのネットワーク形成を促進するなど、国際共同研究のネットワークの充実に取り組んでいる。

分析項目Ⅱ「研究成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 研究の基盤となる学術資料の提供機関として、資料のアーカイブ化、機関リポジトリを通じた研究情報の公開、他機関との連携による情報提供サービスの強化等に取り組んでいる。
- アーカイブズ学の構築に取り組み、国際的・学際的連携を通じて新たな国文学研究の可能性を開拓している。
- 特定研究「在米絵入り本の総合研究」及び「近世的表現様式と知の越境—文学・芸能・絵画による総合的研究—」は、学術的に高い評価を受けるとともに、マスメディアにも取り上げられている。

これらに加え、第1期中期目標期間の現況分析における研究水準の結果も勘案し、総合的に判定した。

2. 注目すべき質の向上

- 4研究系に細分化していた組織を単一の研究部に統合し、目標、規模、様態に応じて基幹、特定、国際連携等の研究カテゴリーに整理、多元化することで、共同研究を有機的に組織する体制への転換を図っている。
- 平成26年度からの日本語の歴史的典籍に関する国際共同研究ネットワーク構築計画において、国際共同研究ネットワーク委員会の設置、国際共同研究の企画立案、国際シンポジウムや共同研究等を実施し、海外の研究者・研究機関とのネットワーク形成を促進するなど、国際共同研究のネットワークを整備している。

- 特定研究「在米絵入り本の総合研究」及び「近世的表現様式と知の越境—文学・芸能・絵画による総合的研究—」は、学術的に高い評価を受けるとともに、マスメディアにも取り上げられている。

国立国語研究所

I	研究の水準	研究 3-2
II	質の向上度	研究 3-4

I 研究の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

分析項目 I 研究活動の状況

〔判定〕 期待される水準を上回る

〔判断理由〕

観点1-1「研究活動の状況」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 日本語及び日本語教育に関する国際的研究拠点として、第2期中期目標期間（平成22年度から平成27年度）に基幹型共同研究プロジェクトを平均15件実施するなど、各種共同研究プロジェクトを実施している。
- 第2期中期目標期間の著書・編著・学術論文等の印刷物は平均約131件（教員一人当たり平均4.5件）、国内学会等での講演は平均約78件（教員一人当たり平均2.7件）、国際学会等での講演は平均約50件（教員一人当たり平均1.7件）となっている。
- 第2期中期目標期間の科学研究費助成事業の採択状況は、平均33件（約9,400万円）となっているほか、新規採択率は40%から75%の間を推移している。

観点1-2「共同利用・共同研究の実施状況」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 大学及び研究者コミュニティの研究基盤となる日本語言語資源を構築、公開しており、「日本語歴史コーパス」は、平成25年から平安時代編及び室町時代編の一部計100万語を公開しているほか、平成24年から近代語の「明六雑誌コーパス」（18万語）、平成26年から「国民之友コーパス」（101万語）を公開している。また、平成23年に完成・公開開始した1億語規模の「現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）」は、3,500名の契約ユーザー等によって平成27年に年間100万回以上検索されている。
- 国内外の研究文献情報を収集・データベース化し、ウェブサイトで公開している。「日本語研究・日本語教育文献データベース」のレコード数は18万件、年間アクセス数は8万5,000件となっている。

以上の状況等及び国立国語研究所の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点2-1「研究成果の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 学術面では、特に言語学、日本語学の細目において特徴的な研究成果がある。また、総合研究テーマを「世界諸言語から見た日本語の総合的研究」としており、「日本語レキシコンの音韻特性」等の19件の基幹型共同研究プロジェクトを中心に実施している。
- 特徴的な研究業績として、言語学の「日本語レキシコンの音韻特性」、「日本語レキシコンの文法的・意味的・形態的特性」、日本語学の「コーパス日本語学の創成」がある。
- 社会、経済、文化面では、特に日本語学、日本語教育の細目において特徴的な研究成果がある。
- 特徴的な研究業績として、日本語学の「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究」、日本語教育の「多文化共生社会における日本語教育研究」がある。

以上の状況等及び国立国語研究所の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

なお、国立国語研究所の専任教員数は33名、提出された研究業績数は7件となっている。

学術面では、提出された研究業績6件（延べ12件）について判定した結果、「SS」は2割、「S」は7割となっている。

社会、経済、文化面では、提出された研究業績4件（延べ8件）について判定した結果、「S」は10割となっている。

（※判定の延べ件数とは、1件の研究業績に対して2名の評価者が判定した結果の件数の総和）

Ⅱ 質の向上度

1. 質の向上度

〔判定〕 改善、向上している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「研究活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 第2期中期目標期間に基幹型共同研究プロジェクトを平均 15 件実施するなど、各種共同研究プロジェクトを実施している。
- 第2期中期目標期間の科学研究費助成事業の新規採択率は、40%から 75%の間を推移している。
- 大学及び研究者コミュニティの研究基盤となる日本語言語資源を構築、公開している。平成 23 年に完成・公開開始した「現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）」は1億語規模の均衡コーパスであり、平成 27 年に年間 100 万回以上検索されており、論文への引用も 600 件以上となっている。

分析項目Ⅱ「研究成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 特徴的な研究業績として、言語学の「日本語レキシコンの音韻特性」、「日本語レキシコンの文法的・意味的・形態的特性」、日本語学の「コーパス日本語学の創成」がある。
- 平成 24 年に締結したドイツの出版社との包括的出版協定に基づき、「日本語研究英文ハンドブック」（全 12 巻）シリーズを企画し、これまでに5巻を刊行し、日本語研究の国際発信を行っている。

これらに加え、第1期中期目標期間の現況分析における研究水準の結果も勘案し、総合的に判定した。

国際日本文化研究センター

I	研究の水準	研究 4-2
II	質の向上度	研究 4-4

I 研究の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

分析項目 I 研究活動の状況

〔判定〕 期待される水準を上回る

〔判断理由〕

観点1-1「研究活動の状況」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 第2期中期目標期間（平成22年度から平成27年度）に25件の共同研究を実施しているほか、海外シンポジウムを6件、海外研究交流シンポジウムを4件開催している。また、国内外平均18名の執筆者による『Japan Review』（年1回刊行）において62件の査読付き英語論文を発表するとともに、『日文研叢書』、『Nichibunken Monograph』等を刊行し、ウェブ上で公開している。
- 第2期中期目標期間において、国際共同研究への外国人研究者の参加は11名、外国人研究者の受入は20名増加している。
- 国際交流基金や在外日本大使館の支援・協力を得て研究集会やワークショップの開催、講演・集中講義・セミナー等のための教員派遣を行うなど、海外での日本研究拠点の強化に貢献している。

観点1-2「共同利用・共同研究の実施状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 海外の研究者コミュニティとの連携を強化しており、海外在住の研究者を共同研究員として配置し、国際的な日本研究のリーディングハブとしての体制の構築など、国際共同研究の充実を図っている。
- ロンドン大学東洋アフリカ学院（SOAS）、大英博物館、立命館大学アート・リサーチセンターとの共同研究「国際春画プロジェクト」では、平成25年度に大英博物館において「春画—日本美術の性と楽しみ」を開催している。
- 怪異・妖怪の絵巻物等のデータベースを公開することにより一般社会の興味にこたえるとともに、データベースの充実を図っている。また、平成27年度末から日本研究基礎資料高度利用情報システム「KATSURA-II」の運用を開始している。

以上の状況等及び国際日本文化研究センターの目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 期待される水準を上回る

〔判断理由〕

観点2-1「研究成果の状況」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 学術面では、特に日本文学の細目において、特徴的な研究成果がある。
- 特徴的な研究業績として、日本文学の「日記の総合的研究」があり、研究成果は『史学雑誌』の「2010年の歴史学界—回顧と展望」欄に取り上げられている。
- 社会、経済、文化面では、特に日本文学の細目において卓越した研究成果がある。
- 卓越した研究業績として、日本文学の「日記の総合的研究」があり、『御堂関白記』は平成25年度にユネスコ記憶遺産に登録されている。
- 特徴的な研究業績として政治学の「近代日本における指導者像と指導者論」、文化人類学・民俗学の「怪異・妖怪文化の伝統と創造—研究のさらなる飛躍に向けて—」、建築史・意匠の「仕掛けと概念：空間と時間の日仏比較建築論」がある。

以上の状況等及び国際日本文化研究センターの目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

なお、国際日本文化研究センターの専任教員数は28名、提出された研究業績数は11件となっている。

学術面では、提出された研究業績9件（延べ18件）について判定した結果、「SS」は1割、「S」は7割となっている。

社会、経済、文化面では、提出された研究業績7件（延べ14件）について判定した結果、「SS」は4割、「S」は4割となっている。

（※判定の延べ件数とは、1件の研究業績に対して2名の評価者が判定した結果の件数の総和）

Ⅱ 質の向上度

1. 質の向上度

〔判定〕 高い質を維持している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「研究活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 外国人研究者の招へい人数や招へい回数の制限を撤廃した結果、海外の研究者との連携を促進する体制を整備している。また、「植民地帝国日本における知と権力」をめぐる国際共同研究の場では、朝鮮史研究者と台湾史研究者の議論等が行われている。
- 公募による共同研究の課題を毎年度1件採択し、研究課題の企画者を客員教員（外国人研究員）として共同研究の代表者に迎えている。平成23年度から平成24年度に実施した、共同研究「仕掛けと概念：空間と時間の日仏比較建築論」では、日本における空間概念や建築、空間構築の在り方について、フランスの専門家との間で、日仏の比較に焦点を当て、意見交換を図り、その成果論集はフランス建築アカデミーより、建築アカデミー2014年度書籍賞として顕彰されるなど、分野横断的で新領域開拓型の野心的研究を目標に据える一方、その成果を公表し、一般市民の関心にもこたえている。

分析項目Ⅱ「研究成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 日本の大衆文化研究を重視するとともに、外国人研究者の視点も取り入れながら、怪異・妖怪の分野等の日本のポップ・カルチャー全般を研究対象としている。
- 卓越した研究業績として、日本文学の「日記の総合的研究」があり、『御堂関白記』は平成25年度にユネスコ記憶遺産に登録されている。

これらに加え、第1期中期目標期間の現況分析における研究水準の結果も勘案し、総合的に判定した。

2. 注目すべき質の向上

- 外国人研究者の招へい人数や招へい回数の制限を撤廃した結果、海外の研究者との連携を促進する体制を整備している。
- 卓越した研究業績として、日本文学の「日記の総合的研究」があり、『御堂関白記』は平成25年度にユネスコ記憶遺産に登録されている。

総合地球環境学研究所

I	研究の水準	研究 5-2
II	質の向上度	研究 5-4

I 研究の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

分析項目 I 研究活動の状況

〔判定〕 期待される水準を上回る

〔判断理由〕

観点1-1「研究活動の状況」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 文理融合型の学際的研究に基づく地球環境問題の解明等の課題解決型の研究により、具体的な地域課題の解決の方向を示す新しい研究方法を追求しており、文理融合型・課題解決型の国際共同研究（研究プロジェクト）は、平成22年以降開始した10件を含め、23件を実施している。
- 第2期中期目標期間（平成22年度から平成27年度）の科学研究費助成事業の採択状況は、新規は8件から16件の間、継続は19件から31件の間を推移しており、採択金額は平均約9,930万円となっている。また、受託研究の受入状況は10件から15件の間、平均約6,890万円となっているとともに、平成22年度と平成25年度には科学技術振興機構戦略的創造研究推進事業（CREST、RISTEX）等に採択されている。

観点1-2「共同利用・共同研究の実施状況」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 第2期中期目標期間に実施した文理融合型・課題解決型の研究プロジェクトに、国内外の研究者5,835名（自然系2,967名、人文系1,811名、社会系300名、複合系757名）が参加しており、研究協力協定締結機関は28カ国98機関となっている。
- 総合地球環境学では、安定同位体を用いた研究を重点的に推進し、実験施設の提供を行っている。同位体環境学シンポジウムは、平成23年度以降毎年実施し、平均約130名が参加しているほか、平成27年度からは京都大学生態学研究センターと連携して講習会を開催するなど、人材育成に取り組んでいる。
- 平成24年度に採択された「大学間連携を通じた広域アジアにおける地球環境学リポジトリの構築—環境保全と地域振興を目指す新たな知の拠点形成事業—」では、全国の20機関26部局と共同で「地球環境学リポジトリ」のプロトタイプを構築している。各機関の研究資源をセマンティック Web 技術を用いて連携することで、機関間連携、地球環境学、地域研究、情報学の連携体制を整備し、平成27年度にパイロット研究を7課題実施している。

以上の状況等及び総合地球環境学研究所の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 期待される水準を上回る

〔判断理由〕

観点2-1「研究成果の状況」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 学術面では、特に環境農学（含ランドスケープ科学）の細目において卓越した研究成果がある。
- 卓越した研究業績として、環境農学（含ランドスケープ科学）の「農業が環境を破壊するとき」は、文理融合型研究によりユーラシア大陸における農耕活動と自然環境の関係とその変遷を明らかにしている。
- 社会、経済、文化面では、特に環境農学（含ランドスケープ科学）の細目において卓越した研究成果がある。また、文理融合型の学際的研究に基づく地球環境問題の解明を行い、科学と社会との連携による課題解決型の研究を進めている。
- 卓越した研究業績として、環境農学（含ランドスケープ科学）の「農業が環境を破壊するとき」があり、社会的、啓蒙的な書籍を出版している。また、平成22年度から平成23年度に実施した企画展「あしたのごはんのために」の来場者は延べ約14万名となっている。

以上の状況等及び総合地球環境学研究所の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

なお、総合地球環境学研究所の専任教員数は28名、提出された研究業績数は6件となっている。

学術面では、提出された研究業績6件（延べ12件）について判定した結果、「SS」は2割、「S」は8割となっている。

社会、経済、文化面では、提出された研究業績6件（延べ12件）について判定した結果、「SS」は3割、「S」は7割となっている。

（※判定の延べ件数とは、1件の研究業績に対して2名の評価者が判定した結果の件数の総和）

II 質の向上度

1. 質の向上度

〔判定〕 質を維持している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「研究活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 外部評価委員会による研究プロジェクトの採択、評価方法の整備を行っている。各研究プロジェクトでは海外の大学、研究機関等との共同研究の推進により、国際シンポジウムでは海外から研究者を招へいするなどしている。
- 地球環境研究に関する国際的な枠組みである Future Earth への協力を推進しており、アジアでの地球環境研究に関する中核的機関としての役割を果たしつつある。

分析項目Ⅱ「研究成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 課題解決志向型の研究として、環境政策・環境社会システムの「東南アジアにおける持続可能な食糧供給と健康リスク管理の流域設計」は、フィリピンのラグナ湖の再生と地域振興への貢献によって、フィリピン政府より「湖の魂（Diwang Lawa）賞」を受賞しているほか、考古学・歴史学における高精度な年代測定法や安定同位体、DNA 分析等の融合等、研究の学際的な深化や高度化に取り組んでいる。

これらに加え、第1期中期目標期間の現況分析における研究水準の結果も勘案し、総合的に判定した。

国立民族学博物館

I	研究の水準	研究 6-2
II	質の向上度	研究 6-4

I 研究の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

分析項目 I 研究活動の状況

〔判定〕 期待される水準を上回る

〔判断理由〕

観点1-1「研究活動の状況」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 国内外の文化人類学・民族学研究の拠点として、国際共同研究（機関研究）に設けた研究領域「包摂と自律の人間学」及び「マテリアリティの人間学」に包括される9国際共同研究プロジェクトを実施している。
- 第2期中期目標期間（平成22年度から平成27年度）の科学研究費助成事業の採択状況は、平成22年度の51件から平成27年度の66件へ増加しており、新規に採択された課題120件を含め、合計326件（約12億円）となっている。また、受託研究の受入状況は、26件（約1億7,300万円）となっている。
- 第2期中期目標期間に学術資料を効率的に収集・整理する文化資源プロジェクトを269件実施し、研究基盤の充実を図っており、標本資料は平成22年度の約27万点から平成27年度の約34万点へ約7万点増加している。

観点1-2「共同利用・共同研究の実施状況」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 研究成果を効果的に公開し、社会還元を円滑に図ることを目的として、「研究成果プログラム」による国際研究集会の開催を支援し、国際化の推進に取り組んでいる。また、国際シンポジウムの実施件数は、第1期中期目標期間（平成16年度から平成21年度）と第2期中期目標期間を比較すると、114件（参加者数8,509名）から128件（参加者数11,862名）へ増加しており、参加国は52か国・地域となっている。そのほか、社会一般向けの国際研究集会、館シンポジウムの開催、国際研究集会への研究者の海外派遣等を実施している。
- 第2期中期目標期間に15機関と国際交流協定を締結しており、海外の研究機関との交流協定は22件となっている。
- 次世代研究者との協働による人材育成を図るため、第2期中期目標期間に延べ111名の博士後期課程学生が共同研究へ参加しているほか、共同研究への参加資格を与えている。また、日本学術振興会特別研究員（PD）を平均2.5名受け入れているほか、平成27年度の外来研究員のうち若手研究者は46名となっている。
- 第2期中期目標期間に特別展示、企画展示を計56回（平均9.3回）実施しているほか、みんぱくゼミナール等の公開講演会などを計177回（平均29.5回）

実施するなど、研究成果の社会的還元を行っている。
以上の状況等及び国立民族学博物館の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 期待される水準を上回る

〔判断理由〕

観点2-1「研究成果の状況」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 学術面では、特に文学一般、文化人類学・民俗学、文化財科学・博物館学の細目において特徴的な研究成果があり、捕鯨をめぐる実践人類学的考察や、災害復興における在来知といった現実的問題への対応を含んだ研究を行っている。
- 特徴的な研究業績として、文学一般の「民衆文学と他者認識に関する言語人類学的研究」、「中世イスラーム世界におけるアレクサンドロス伝承と驚異譚の比較文学的研究」、文化人類学・民俗学の「捕鯨文化に関する学術的研究」、文化財科学・博物館学「災害で被災した民俗文化財の保存と活用に関する研究」がある。
- 社会、経済、文化面では、特に文化人類学・民族学の細目において卓越した研究成果がある。
- 卓越した研究業績として、文化人類学・民族学の「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」、「文化の表象に関する博物館の人類学的研究と実践」がある。そのうち「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」では、平成27年に研究代表者がペルー国から文化功労賞を授与されている。

以上の状況等及び国立民族学博物館の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

なお、国立民族学博物館の専任教員数は54名、提出された研究業績数は13件となっている。

学術面では、提出された研究業績13件（延べ26件）について判定した結果、「SS」は2割、「S」は8割となっている。

社会、経済、文化面では、提出された研究業績11件（延べ22件）について判定した結果、「SS」は3割、「S」は7割となっている。

（※判定の延べ件数とは、1件の研究業績に対して2名の評価者が判定した結果の件数の総和）

Ⅱ 質の向上度

1. 質の向上度

〔判定〕 高い質を維持している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「研究活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 研究領域「包摂と自律の人間学」及び「マテリアリティの人間学」に包括される9国際研究プロジェクトでは、海外の研究者を迎えて研究の重点化・国際化を図っている。また、国際共同研究の成果を第2期中期目標期間には11冊を出版しており、英語のほかロシア語等でも出版し、国際発信力を高めている。
- 第2期中期目標期間の科学研究費助成事業の採択件数は平成22年度の51件から平成27年度の66件に増加しており、新規採択された課題は120件となっている。
- 館外の研究者や若手研究者を研究代表者としているほか、人材育成を組織的に行うなど、戦略的な国際的学術活動に取り組んでいる。国際共同研究の出版物は、第1期中期目標期間の8冊から第2期中期目標期間の11冊に増加しており、英語のほかロシア語等でも出版を行っている。また、館外研究者が代表を務める共同研究は、平成22年度の2件から平成27年度の22件へ増加している。

分析項目Ⅱ「研究成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 「捕鯨文化に関する学際的研究」、「高齢化社会のウェルビーイング」に関する共同研究等のグローバルで今日的なテーマを国際的視野で捉えるとともに海外へ研究成果を発信している。
- 博物館としての機能を一層認識し、フォーラム型博物館のコンセプトに沿って常設展示方法を刷新するなど、視覚障害者に配慮した展示手法の開発研究や被災文化財への対応の研究に取り組んでいる。
- 研究成果が学術誌の書評の対象になるとともに、全国紙等で取りあげられている。
- 文化人類学・民族学の「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」では、アンデス文明史上最古の金属製品を伴う墓の発掘で、文明形成を解明したことにより、研究代表者がペルー国文化功労賞を受賞している。

これらに加え、第1期中期目標期間の現況分析における研究水準の結果も勘案し、総合的に判定した。

2. 注目すべき質の向上

- 研究領域「包摂と自律の人間学」及び「マテリアリティの人間学」に包括される9国際研究プロジェクトでは、海外の研究者を迎えて研究の重点化・国際化を図っている。また、国際共同研究の成果を第2期中期目標期間には11冊を出版しており、英語のほかロシア語等でも出版し、国際発信力を高めている。
- 文化人類学・民族学の「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」では、アンデス文明史上最古の金属製品を伴う墓の発掘で、文明形成を解明したことにより、研究代表者がペルー国文化功労賞を受賞している。

